

ロシア極東を知る

狩野 修二

ロシア極東は、日本と近接しているサハリンやウラジオストクなどを含むロシア連邦最東部にある地域である。面積はロシア全体の三分の一、日本の一六倍と非常に広大であるが、一方で人口は約六二六万人（二〇一二年一月現在）と少ない。

モスクワから遠く離れたこの地域は、長らく開発が進まず停滞していたが、近年ロシアのアジア太平洋志向が強化されたことなどにより、複数の地域発展計画が策定されている。また石油や天然ガス開発やそのためのインフラ整備等も進んでいる。二〇一二年にはAPEC（アジア太平洋経済協力）がウラジオストクで開催されたが、これに合わせて巨額な予算が投じられ街のインフラ整備が行われるなど地域の開発が進んでいる。

本稿では、今後ますます発展していくことが期待されるロシア極東地域に関する資料のうち、二〇〇〇年以降に出版されたものの中からいくつか紹介していきたい。

まず、ロシア極東事情を総合的に知る資料として、堀内賢志・齋藤大輔・濱野剛編著『ロシア極東ハンドブック』（東洋書店二〇一二年）があげられる。ロシア極東の政治、国

際関係、経済、貿易、社会等に章立てされており、多方面からこの地域のことを知ることができる。また最終章は、日本との関係について書かれており、歴史や領土問題、自治体間の交流等の情報のほか、対日観などロシア側の見方も載っており、極東地域の理解が深められる。巻末には資料編として、ロシア極東を構成する各州・共和国等の情報や統計データ、関連年表が豊富に記載されており非常に便利である。

ロシア極東は、中国東北部や朝鮮半島・日本を含んだ北東アジア地域の中でも語られることが多いが、そうした視点からは、環日本海学会編『北東アジア事典—環日本海圏の政治・経済・社会・歴史・文化・環境』（国際書院二〇〇六年）がわかりやすい。書名に挙げられているそれぞれの分野について極東ロシアと周辺国の現状を比較しながら理解することができる。

この地域の歴史についてさらに詳しく知る資料としては、村上昌敬訳『ロシア沿海地方の歴史—ロシア沿海地方高校歴史教科書（世界の教科書シリーズ8）』（明石書店二〇〇三年）があげられる。書名にあるとおり、現地の教科書を翻訳したもので

はあるが、現在のウラジオストクを含む沿海地方の歴史を石器時代の古代から二〇世紀末まで概観することができる。このほか、国際関係史に焦点を当てた資料として、防衛システム研究所編『極東ロシアの軌跡』（内外出版二〇一二年）がある。九世紀から現代までのこの地域をめぐる国際情勢とロシアの軍事態勢に関する説明と分析がなされている。また北方領土問題についても共同宣言や両国の覚書、政府発表文書などがまとめて掲載されており有用である。

極東地域の経済関連については、大津定美・韓福相・横田高明編著『北東アジアにおける経済連携の進展』（日本評論者二〇一〇年）が複数の観点から分析している資料としてあげられる。「北東アジア」と書名にはあるが、全一章中七章がロシア関連となっており、ロシア極東の開発戦略やエネルギー資源、貿易関係、国際労働移動等さまざまな事柄について書かれている。極東地域の経済活動においてとくに目覚ましいのがエネルギー資源開発であるが、福井県立大学編『北東アジアのエネルギー政策と経済協力』（福井県立大学二〇一一年）では、ロシアのエネルギー政策とその変遷や石油・ガスの消費が急速に伸びている近隣諸国とのエネルギー協力およびその影響について書かれている。

経済状況の変化は人口の移動を促す。特に極東地域と国境を接する中国東北部の影響は大きい。近年中国東北部も政府の主導により大規模な開発が進められてきた。これにより、ロシアから中国へまた中国からロシアへと双方の人口の移動が起きている。大津定美編著『北東アジアにおける国際労働移動と地域経済開発』（ミネルヴァ書房二〇〇五年）では、主に中口間の経済協力や貿易、人口移動の現状とその問題点について分析している。

ロシア連邦は他民族国家であるが、極東地域を含むシベリアには数多くの先住民が暮らしており、その民族集団は四〇以上に上るといえる。高倉浩樹編著『極寒のシベリアに生きる—トナカイと氷と先住民』（新泉社二〇一二年）では、サハ共和国の先住民に焦点をあて、彼らが極寒の地の環境や動物をどのように利用して暮らしているのかを調査している。またこの資料では彼らの話す言語についても紹介しているが、津曲敏郎編著『北のことはフィールド・ノート—18の言語と文化』（北海道大学図書刊行会二〇〇三年）では当地の言語事情とその話者である民族の紹介がされており合わせて参照することにより理解が深まる。

（かのう しゅうじ／アジア経済研究所 図書館）